08年サバ類１

単位：数量，1000トン、価格，円／kg

年	数量 漁獲	産地	輸入	輸出 生冷	輸出 缶	東京 生	東京 冷	東京 塩干	東京 塩蔵	在庫	加工品 缶	加工品 干	加工品 蔵	加工品 節	消費支出 生(グラ)
19	460	411.2	45.8	156.3	2.5	12.1	3.9	3.3	0.6	100.8	28	16.9	26.3	14.8	1,610
20	514	452.4	69.8	133.1	1.4	10.2	4.0	3.1	0.4	100.0					1,321
%	112	110	152	85	56	84	103	95	73	99	0	0	0	0	82

年	価格 産地	輸入	輸出 生冷	輸出 缶	東京 生	東京 冷	東京 塩干	東京 塩蔵	消費支出 生(円)
19	82	266	90	291	369	453	460	426	1,360
20	86	244	112	356	427	495	372	525	1,166
%	105	92	124	122	116	109	81	123	86

漁獲と資源

20年のサバ類(マサバとゴマサバ)の漁獲量は､51.4万トンで前年(46万トン)をやや上回り、ほぼ近年の平均(50万トン)の水準であった。

これは、特に北部太平洋海域での漁を反映したものである。

マサバ太平洋系群の資源量は1970年代には400万トン、1980年代前半は150万トン程度で推移したが、1980年代末に加入量の減少と強い漁獲圧により減少し近年では低水準にある。親魚量は1980年代中期の50万～60万トンから1990年代には5万～12万トンへと低下した。再生産関係（＝加入尾数／親魚量）は自然の要因により、また年代により変化するが、親魚量が45万トン以下になった1986年以降は加入量が減少すると同時に変動幅が大きく不安定になった。1992年、1996年、2004年に少ない親魚量から卓越年級群が発生しており、2004年級群に支えられて資源量・親魚量ともに低水準の近年では高い値で推移している。 2007年もこれらの年に準ずる高い年級群が発生した。2007年資源量は56万トン、親魚量は19万トンと評価されている。

マサバ対馬暖流系群の資源量は、1973～1989年は88万～126万トンで比較的安定していた。1987～1990年にかけて減少した後、増加傾向を示し、1993～1996年は110万～137万トンの高い水準に達した。1997年以降、資源は急減し、2006年は51万トン、2007年は53万トンと低い水準に留まっている。加入量は1997年以降低い値で推移していて、2004年にはやや増加したものの、現在は依然として低い水準にある。親魚量は1996年を近年の頂点に2003年まで減少したが、2004年以降は緩やかに増加している。再生産成功率は1991年以降、比較的高い値を示しているが、2005～2007年はやや低い値となっている。

近年安定している太平洋系群のゴマサバの資源量は､1995～2007年の資源量(7月時点)は、1995年以降の比較的安定した加入量の継続と1996、2004年級群の卓越した高い加入量によって300千トン前後から2004～2005年には600千トンに達する高い水準にある。2005年の616千トンのピークの後は､続く2005、2006年級群の加入量が低いために減少し、2007年は327千トンであった。2004年級群は、1996年級群を上回る卓越年級群であり、現在の高い親魚量（2007年：165千トン）の主体となっている。2008年の資源量は、加入量を直近の調査船調査から推定して2007年の値から前進法で推定すると244千トンとされている。

また東シナ海系群のゴマサバの資源量は1992～2007年に比較的安定して同程度の水準を保っている。近年では、2005、2006年に高い値を示したが、2007年はやや減少した。加入量は1992年以降、多少は変動するものの、おおむね3億尾程度の水準を保っている。近年では、2004～2006年にやや高い値で推移した。親魚量は2000～2004年にかけて減少傾向であったが、2004年の高い加入量のため2005年に増加し、2006、2007年も高い値を維持した。発生初期の生き残りの良さの指標値になると考えられる再生産成功率は、1993、2004年に高い値を示した他は比較的安定している。

産地水揚量と価格(継続漁港)

20年の産地水揚量は、45.2万トンで北部太平洋海域が好調だったことで前年（41.1万トン）を上回った。

価格は、水揚増加と、北部太平洋海域での好調な輸出もあってサイズが小さかった割には86円で前年（82円）を上回った。

海域別漁獲量

本年の海域別漁獲量の特徴は、常磐、山陰が好調、東シナ海、東海がやや低調で、全国的にはややとなった増加となった。一昨年、昨年と漁獲があった道東海域では、漁獲がなかった。

海域別漁獲量

道　東	0.8	0.0	0
三　陸	97.5	95.8	98
常　磐	84.8	142.9	169
東　海	56.0	50.8	91
薩　南	22.0	18.9	86
東ｼﾅ海	128.0	111.5	87
山　陰	22.1	26.9	122
その他	0.0	0.0	#DIV/0!
合　計	411.1	446.9	109

三陸（単位：1000トン）

月	19年	20年
1	0.7	0.3
2	0.5	0.6
3	0.5	0.2
4	0.0	0.1
5	0.0	0.0
6	1.5	0.8
7	19.5	15.2
8	28.1	24.6
9	21.7	28.2
10	16.1	14.2
11	6.4	10.4
12	2.4	1.4
計	97.5	95.8

MAX　H53　69万トン

常磐（単位：1000トン）

月	19年	20年
1	21.2	9.0
2	8.0	4.2
3	1.0	6.2
4	0.2	13.3
5	0.4	18.9
6	0.1	11.9
7	5.2	33.1
8	4.5	6.5
9	4.2	4.2
10	8.9	8.0
11	9.9	14.7
12	21.2	12.8
計	84.8	142.9

MAX　H6　14.1万トン

三　陸

本年の三陸の漁は、北上期は昨年をやや下回ったが、南下期には昨年をやや上回る漁獲となり比較的順調であった。

本年は昨年より遅い８月上旬に入って三陸北部でスルメイカとの混獲でまき網によるマサバの初漁があり、例年より遅い１１月までまとまった漁獲がみられた。２歳魚以下の魚が少なく昨年を下回った。また本年も８月上旬からまき網によるスルメイカの漁獲が始まり、昨年の約９０００トンを下回る漁獲で３０００トンであった。

魚体は、当初は３歳魚(2005年級群)主体であり、冬場は１歳魚に変わった。

また、本年のブリ（イナダ、ワカシ）の漁獲は、１０、１１月主体にまとまった漁獲であったが、昨年に比べるとかなり少なくなった。

常　磐

本年の越冬サバ漁は昨年同様低調に推移し、結局32.7千トンの漁獲で前年(30.4千トン)を若干上回った。

また、春（５～７月期）の北上期の漁獲は比較的順調で63.9千トン程度で前年(5.7千トン)を大幅に上回った、南下群の漁獲は35.5千トンに終わり前年（40千トン）をやや下回った。

なお北部太平洋海域では資源回復計画に基づく休漁や時化等も多く操業はかなり制約された。

なお、本年のブリ類（イナダ、ワカシ）の漁獲は上期前半と、下期後半にまとまり近年では最高の漁獲となった。

魚体は、周年を通じてほぼ３歳魚（2005級群）であったが、漁期後半には、０，１歳魚が多かった。

東　海

伊豆諸島周辺を主漁場として、主に産卵群を対象とするサバタモ抄い漁業は、昭和54(1978)年の17.7万トンをピークに減少しており、近年においても概ね1万トン以下の低調な漁獲で操業隻数も往時に比べ大幅に減少している。昨年は平成年代では始めてマサバの漁獲がゴマを凌駕したが、またゴマが卓越した格好となり、ゴマが多かった。なお本年は699隻（前年459隻）の出漁で延べ出漁隻数も引き続き増加しており,漁獲も2,147トン（前年4,001トン）で昨年を大幅に下回る漁獲となった。

20年の漁獲量は、マサバが441トンで前年（2,673トン）を大幅に下回った。ゴマサバは1,707トン（前年1,328トン）でマサバが大幅減、ゴマサバはかなり増加した。

東シナ海（単位：1000トン）

月	19年	20年
1	18.5	8.9
2	9.3	2.4
3	8.6	3.4
4	3.2	0.0
5	3.5	0.0
6	2.2	2.0
7	5.6	4.1
8	4.7	6.0
9	8.1	16.2
10	15.4	18.1
11	27.7	25.4
12	21.2	21.7
計	128.0	111.5

ＭＡＸ　Ｈ８　22.2万トン

山　陰（単位：1000トン）

月	19年	20年
1	8.3	1.5
2	2.2	1.3
3	1.2	0.2
4	1.2	0.2
5	0.0	0.2
6	0.6	0.0
7	0.1	0.1
8	0.3	0.1
9	0.4	0.4
10	1.1	6.9
11	2.2	6.8
12	4.4	9.3
計	22.1	26.9

ＭＡＸ　Ｈ６　14.1万トン

東　シ　ナ　海

20年前半の年明け後の冬漁は一転低調に推移し水揚げも大幅に減少した。また夏場の閑漁期の漁も前年をかなり下回った。しか、9月以降の秋・冬の盛漁期には比較的好漁となり、結果的には昨年をやや下回る水揚げにとどまった。

魚体は、本年も概ね300g以下のギリ、ローソクサバ（1歳魚）が漁獲の主体ではあったが、その割合は約81％で近年ではかなり多い部類になり、前年（50％)を大きく上回った。したがって、本年は鮮魚向けを始め、餌、輸出向けにも多く利用されたのが特徴。

山　陰

この海域で漁況は、年明け後の漁が、九州西部同様低調に推移し、また閑漁期の夏場の漁も引続き低調であった。そして秋漁以降は久し振りにまとまった漁となり水揚げを伸ばし、その結果前年をやや上回った。

魚体は、2006、2007年級群が主体であった。

輸　　入

本年の輸入量は、7万トンで、前年（4.6万トン）を上回った。これは主にノルウェーのＴＡＣ枠の増による搬入の増と前年のサバが年明け後の搬入になったことを反映したものである。本年の搬入ピークは依然12月集中型になったが、近年は国産サバの好漁もあって、搬入が遅くなっているのが特徴であるが、今年の国産サバは、型や品質にやや問題もあって、結果的には輸入サバが多くなった。

主要な輸入国は本年も依然ノルウェーが85%と圧倒的なシェアとなっている。また、それ以外の国ではカナダ、イギリスが、それぞれ2,266トン（前年2,118トン）、101トン(前年76トン)、アイルランドが0トン(前年680トン）、中国が7,713トン(前年547トン)で中国がノルウェーの次に多くなった。これは、養魚用餌料として上半期にまとまった搬入があったためである。

本年のノルウェーからの輸入原料は600サイズ以下が84%（前年:88%）主体に600ＵＰが16%（前年:12%）で、シェアでは600UPが減少し、4-6サイズが引続き増加している。また最近で

は600ｇUPを始め日本とロシア、中国等諸外国との買値の競合関係が顕著になっている他、本年は、ノルウェーサバを巡っては特に600UPサイズでは、ロシアとの間に買い負け現象が顕著であったが、下半期の金融危機の影響もあってか、日本のシェアが拡大（数量・金額とも）している。

価格は、244円でほぼ前年(266円)を引続きやや下回ったが、これは５，７月にみられた中国からの輸入物の安さを反映している。

また、中国等海外加工が依然活発にみられ、製品輸入も多いが、本年は5,792トンで前年(9,721トン)を下回っており、伸びが止まっている。

輸　出

本年の輸出量は、13.3万トンで極端に多かった前年(15.6万トン)を下回ったが、依然水準としては高く、下期後半の金融危機の影響がなければ昨年並みの水準近くまで達していた可能性もある。これは北部太平洋、九州、山陰地区等のサバが中国、韓国を始め、エジプト、フィリピン、タイ、ナイジェリア、パプアニューギニア等、アジア・アフリカ・中近東諸国に向けて数量を伸ばしたことによるものであるが、本年はタイへの輸出が最も多く次いでナイジェリア、エジプトとなっており、中国は４番目に落ちた。また、缶詰輸出も1.4千トンと前年(2.5千トン)を下回り、最低近い水準となった。

在　庫　量

在庫量は、10万トンと前年(10.1万トン)並みであった。

これは、生産、輸入の増加もあったが、越年在庫がかなり少なかったため、平均在庫が前年並みの数量になったものである。

消費地入荷量と価格

20年の東京消費地入荷量は、国内生産が 若干増加したものの、サイズも昨年に比べ小さいものが多くその結果生鮮が1万トンと前年（1.2万トン）を下回った。

また、冷凍は4千トン（前年3.9千トン）、塩干3.1千トン（前年3.3千トン）、塩蔵0.4千トン（前年0.6千トン）と冷凍原料はやや増加したのみで、製品は何れも減少した。

価格は、生鮮427円（前年369円）、冷凍495円（前年453円）、塩干372円（前年460円）、塩蔵525円（前年426円）であった。

価格は、生鮮、冷凍、塩蔵とも国内原料価格の高値もあって何れも上昇した。

また、消費地市場、末端のスーパー・量販店では、時期によってはゴマサバが目立つようになり、鮮魚販売や、加工品にもかなり利用・定着している。なお消費支出をみると数量・金額とも減少している。